

等の過程で大気中から河川へ供給されると考えた。

Cl⁻ は海岸から内陸へいと著しく減るが Na⁺ はそれ程はげしく減らない。この Cl/Na 比は海塩分離、水滴中の化学反応（氯化して Cl₂ が逃げる）、造岩鉱物の溶入等の説明がなされているが、更に最近 Junge(1958) はアメリカ合衆国の雨水分析から地球外の Na が成層圏から対流圏へ侵入して来ると云う説を出した。Cl/Na 比は海岸からの離れによるが降水の形式にもよりしゅう雨や雷は低気圧性の連続的な雨より Na の割合が大きい。

ニュージーランドで降水中の窒素化合物を調べたところ、アンモニア性、硝酸性のものでなく、主としてアミン類の形で有機質が多く、工業起源でもなく花粉の季節でない時もあるので海洋起源であると考えられ

た。又降水中の有機物は紫外部のスペクトルから主として腐植質であると見る人もいる。沿岸地方の雨が常時 pH が低いのは海洋起源の有機的な酸によるとする考えがある。これら有機物は海面の微生物に関係があると云う。

自然氷晶核は主として土壌鉱物が考えられ、東大で調べた結果では紫蘇輝石、カオリナイト、磁鉄鉱が特にすぐれた氷晶能力をもっている。火山灰では浅間山、草津白根、北海道駒ヶ岳のものが特によく、三原山、桜島の灰がこれに次ぐ。中国の黄土もこれと同じ位である。流星塵、海洋起源の塩粒子、有機物も徹底的に研究する要があろう。

討 論 略

理 事 会 便 り

第17回常任理事会議事録

日 時 昭和34年9月5日(土) 0930~1400

場 所 神田学会会館

出席者 今井・吉武・神山・伊東・畠山・根本・有住
岸保・淵・藤田(臨時) 各理事(順序不同)

決議事項はつぎのとおりである。

1. 数値予報国際シンポジウムに関し、3・4の外国学者の返事に基きおおよその見込みがついたので、来年秋開催することとし、秋の大会時に臨時総会を招集して全会員にはかることとなった。
2. 臨時総会は、岡田賞授賞式後に行うこととなった。

3. 岡田賞候補者推せん委員会からの報告に基き内容について討論の上了承され、全理事にはかることとなった。
4. 高校地学教育に関し、例会等で検討したが当学会としては結論に達しない旨回答することになった。
なお、学会名を許可なく使用しないよう申入れることになった。
5. 東京管区気象台と共催で10月14・15日名古屋で例会を門くこととなった。
6. 8月6日の科学者の原水爆禁止アピール原文を註釈を附し天気のにせることとなった。

学 界 消 息

1. 伊勢湾台風襲来

9月22日9時発生した台風15号はマリアナ付近で中心気圧 895mb、最大風速75メートルの超大型台風となり、北西進しながら、最低中心気圧は 920mb となった。潮岬の南およそ 1,000km 付近で向きを除々に変え、紀伊半島に上陸、岐阜県白川付近、富山の東、を通過、上陸後わずか6時間あまりで日本海に抜けた。その後、佐渡東部、秋田沖、青森県を通り、大平洋に出た。潮岬で観測された最低気圧は 929.5mb で、これは本土襲来の台風で観測された最低気圧の第3位であった。

伊勢湾の西を通過したため、伊勢湾に大高潮を起し、名古屋地域に大被害を与えたので、伊勢湾台風と名付けられた。暴風雨、洪水による被害も大きく、死者、行方

不明は 5,000名を越えた。

2. 台風第16号

小型台風第16号はルソン東方洋上から本邦に接近し、6日18時ごろ屋久島の上を通り、都井岬をかすめて日向難に入り7日5時すぎに四国足摺岬に上陸した。暴風による被害はほとんどなかったが、本邦南岸の諸地域に大雨を降らした。